NO.68

蓬左

HÔSA

昭和10年（1935）開館当時の蓬左文庫の建物（現東京都豊島区目白）
（昭和13年刊「蓬左文庫要覧」より）

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

蓬左文庫公開七十周年記念特別展

家康の遺産―駿府御分物―

元和二年（一六一六）四月に徳川家康が没すると、駿府城内にあった膨大な遺産が、尾張義直、駿河頼宣（後の紀州家）、水戸頼房の三家に分与されました。これを「駿府御分物」と称し、金銀をはじめ、刀剣、武具、茶の湯道具、衣服、調度品など多種多彩でした。

また、駿府に隠居した家康が設けた駿河文庫には、鎌倉幕府の執権北条氏が創設した金沢文庫の旧蔵書、朝鮮の優れた金属活字印刷による書物など当時手に入れることが出来る最高のものが収集されていました。この駿河文庫の蔵書も、将軍家とともに三家に分譲され「駿河御譲本」と呼ばれました。現在、紀州・水戸両家分については、ほとんどその実態を確認することができないのに対し、唯一蓬左文庫に残る尾張徳川家分は、「駿河御譲本」の原型をもっともよく伝えています。

本年は、徳川美術館、蓬左文庫ともに、開館・公開七十周年を迎えます。これを記念し、両館の所蔵品の核となっている尾張徳川家に分与された多岐にわたる家康の遺産を一堂に会して展示いたします。

しゅしたいぜんぶんしゅう
朱子大全文集
朝鮮王朝時代　嘉靖22年（1543）　34.7×21.6cm

朱子学の祖朱熹（1130～1227）の詩文集。その子朱在が編纂したもの。
本書の見返しには、嘉靖22年（1543）に王室から下賜された事を示す「内賜記」があり、これが、出版年をも示している。
附属の「駿河御譲」と朱書きされた墨塗りの本箱は、朝鮮王朝の出版物の多くが同形式の本箱に収められており、朝鮮製という説もある。

むらさきじあおいもんつきあおいのはもんつじがはなぞめはおり
紫地葵紋付葵の葉文辻ケ花染羽織
徳川家康着用　重要文化財
桃山-江戸時代　16-17世紀
丈112.0cm　裄58.8cm

表地は浅葱練貫、裏地は浅葱平絹、綿入。全体に葵紋が散らしてある。葵の葉を白・黄・萌黄・紫に染め、墨描きを加えて変化をもたせている。
この小袖は尾張家の古帳に、「円覚院（四代吉通）様御幼年之節御召服」として、「一　御胴着浅黄絞り御紋ちらし御裏浅黄壱」とある四代吉通着用の遺品である。但し、伝来記録からみて、家康所用の他の遺品と比較して優劣のない縫い絞りの技であり、仕立寸法などからみて、家康遺品と考えられ、平成15年度重要文化財に指定された。

重要文化財
かちょうしっぽうつなぎもんみつだえちんきんうぐはん
花鳥七宝繋文密陀絵沈金御供飯
琉球　17世紀　64.5×50.5㎝

琉球工芸品随一の名品。
御供飯とは、半円球の高い蓋を伴い、高い足のついた盆で、中には大椀を中心に、蓋と托子を伴った小椀を10個格納した神饌用の食器。
慶長4年（1609）、琉球を攻略した島津氏が王府の宝庫から持ち帰り、いくつかを駿府の家康や江戸の秀忠はじめ諸大名に送った。本品はそのうちのひとつと推定される。
盆の見込み中央には王家の紋章三ツ巴が金色で描かれている。

・◆・ 里帰りした「駿河御譲本」 ・◆・

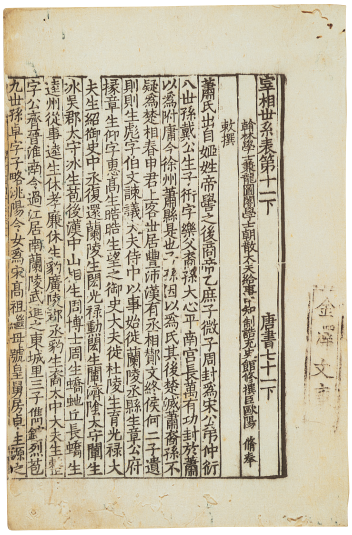
明治四年（一八七一）の廃藩置県によって、名実ともに藩はなくなり、相前後して尾張徳川家の様々な所蔵品の払い下げがおこなわれた。御文庫の蔵書については、明治五年を中心に「駿河御譲本」を含む全体の約三分の一が処分された。このうち二十六件一〇三冊の「駿河御譲本」が現在、国立国会図書館はじめ八カ所に所蔵されていることが確認されている。（蓬左10・11・15号参照）

このたびの展覧会では、東京国立博物館、国立国会図書館、西尾市立岩瀬文庫が所蔵する六件十二冊がご所蔵者の協力により出品され、古巣への里帰りを果たした。

中でも、「重要文化財　宋刊本唐書」（東京国立博物館蔵）は、金沢文庫旧蔵書で、中国の印刷史上、最も優れた印刷物が作られた十二世紀南宋時代の版本である。一冊のみの端本とはいえ、「駿河御譲本」の中でもとくに丁重な扱いを受けていた金沢文庫本が払い出しの対象となったこと自体不思議である。今回は、家康から尾張家に譲られた金沢文庫本六件すべてが一三三年ぶりに揃うこととなった。

礼記　西尾市立岩瀬文庫
江戸時代　17世紀　29×19.5㎝

周易本義　同上
明時代　16世紀　24.6×13.8㎝



重要文化財　宋刊本唐書　南宋時代
12世紀　東京国立博物館蔵　27.4×19.5㎝

Image:TNM Image Archives　Source:http://TnmArchives.jp/

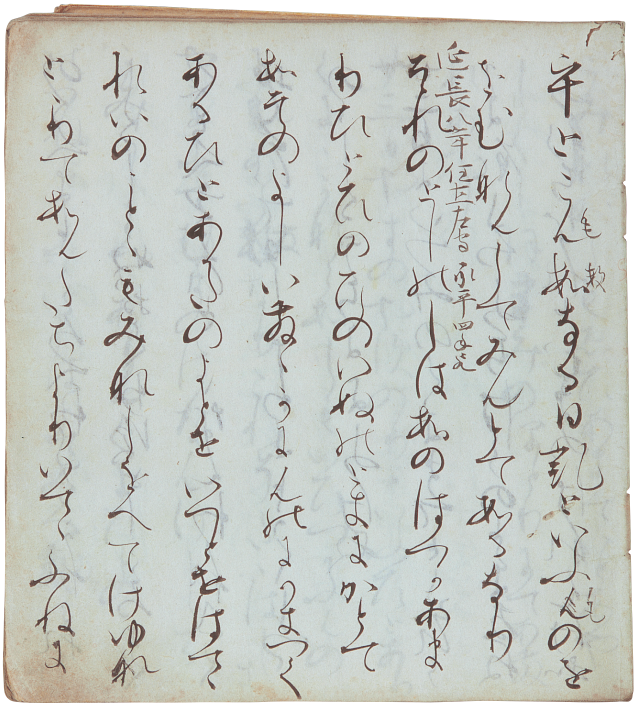
蓬左文庫公開七十周年記念特別展

王朝への誘い―大阪青山短期大学コレクション―

大阪北部の箕面にある大阪青山短期大学（大阪青山学園）には、「本物に触れる教育」理念に基づき、物語や歌集の写本、天皇や公家、武将たちの宸翰や書状、古記録類や経典、奈良絵本や古活字本・嵯峨本をはじめとする版本、近代文学関係の原稿や資料、絵画、漆工品、ヨーロッパ中世の祈祷書など、数多くの貴重な古文書・典籍類が収蔵され、調査・研究・展示する大阪青山歴史文学博物館が設立されています。

今回、この膨大なコレクションの中から、国文学関係の作品を中心に特別に公開されることとなりました。なかでも藤原為家が紀貫之の自筆原本から一字も違わず書写した国宝「土左日記」（鎌倉時代）をはじめ重要文化財「狭衣物語」（鎌倉時代）、重文「松浦宮物語」（鎌倉時代）などの物語類、重文「成尋阿闍梨母集」（鎌倉時代）、重要美術品「是則集」（鎌倉時代）、重文「前十五番歌合」（鎌倉時代）などの歌集、重文「後醍醐天皇宸翰」（鎌倉時代）をはじめとする宸翰、「観普賢経」（平安時代）や「色紙法華経」（平安時代）などの装飾経、「州信印」「源氏物語図屏風」（桃山時代）、住吉如慶筆「白描源氏物語扇面画帖」（江戸時代）、住吉具慶筆「伊勢物語絵詞」（江戸時代）などの絵画作品など、国宝一件・重文十件を含む九十件近くの名品・優品が出品される予定です。これらのさまざまな作品を通じて、培われ育まれてきた王朝の雅びの真髄をご紹介します。

（会期中展示替があります）

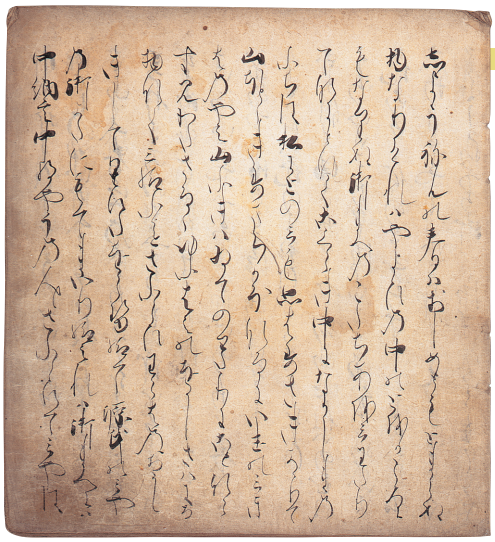


国宝　土左日記（とさにっき）
藤原為家筆　嘉禎2年（1236）　16.7×15.3㎝

紀貫之が土佐守の任期を終え、承平2年（934）12月帰途につき、翌年2月16日に京都の自邸に着くまでの旅日記。
本書は室町時代中頃まで伝来した貫之自筆本から転写された四系統のひとつで藤原定家の子・為家の自筆写本。貫之自筆本を「一字不違」書写した事を記した為家の奥書をもつ。
昭和59年に発見され、翌年青山短期大学コレクションに加えられた。
（展示期間：9月28日～10月10日）

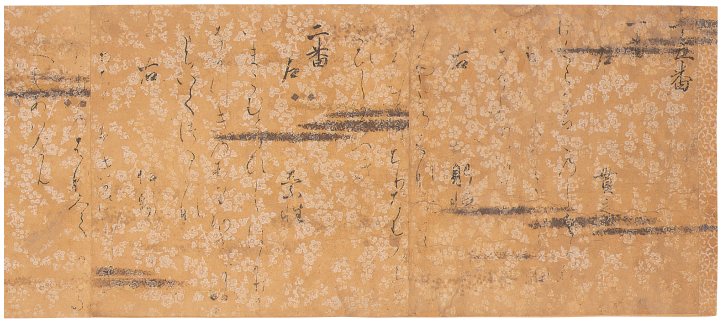
源氏物語図屏風（左隻より「野分」）　「州信」印　桃山時代　162.0×360.5㎝

『源氏物語』から右隻には春から夏、左隻には秋から冬の合わせて11場面が描かれている。
狩野永徳の所用印と同じ印文「州信」の朱印があるが、永徳ではなく、その作風は狩野光信にちかく、光信周辺の桃山時代後期狩野派の画家による源氏絵屏風の遺例と判断されている。



重要文化財　狭衣物語　伝慈円筆　鎌倉時代　16.0×14.8㎝

平安中期に成立した『源氏物語』と並び称せられ、後世に影響を与えた物語。美貌と才能に恵まれた狭衣大将を主人公に、様々な恋愛が描かれている。
伝本は多いが、鎌倉期の写本は少なく、本書は善本のひとつで、鎌倉初期、天台宗の僧で歌人である慈円の筆と伝えられる。



重要文化財　前十五番歌合　伝後光厳天皇宸筆　鎌倉時代　26.4×400.9㎝

古来の歌仙30人の優れた和歌各1首を、左右に配した歌合わせ形式の秀歌撰。藤原公任（966～1041）の撰になる。もとは、1具であったものとみなされている同形式2種類が知られ、成立の順に従って「前十五番歌合」「後十五番歌合」（御物）と呼ばれている。
本書に使用された料紙と同版の唐紙が、弘長元年（1261）藤原為家筆の「大和物語」に使用されており、相前後する時代の書写と推定される。

展示室1

源氏物語の意匠（デザイン）

『源氏物語』は、今から千年ほど前に紫式部という宮廷に仕えていた女性によって書かれた光源氏を主人公とした長編小説です。執筆当初から評判をよび、多くの写本がつくられ、絵画化もされました。今日に至るまで読み継がれる人気の古典文学です。

室町時代ころより、人々の『源氏物語』に対するあこがれは、書写や絵画作品に留まらず、各帖の主題を工芸品の意匠とするようになりました。江戸時代になると、蒔絵の婚礼調度や武家女性の衣服にも意匠化して採り入れられ、武士の魂である刀剣の拵の装飾にも用いられています。五本の縦棒の上端の結び方により帖名をあらわした「源氏香図」や桐木の下に壺を置いて「桐壺」とする判じ物的な意匠まで登場してきます。また、茶の湯の器物の銘に、その器物の持つイメージを投影した帖名を採り入れ、命名されるようにもなります。

このように、人々が『源氏物語』に寄せた想いを、さまざまな作品により紹介します。

中色縮緬地御所解文袷（なかいろちりめんじごしょどきもんあわせ）
貞徳院矩姫(尾張家14代慶勝夫人)着用
江戸時代　19世紀
丈173.6㎝　総裄121.2㎝

中色と呼ばれる明るい水色の縮緬地に、上身は桜花と松に月と殿舎・御所車を配し、腰下には咲き競う秋草の中に柴折戸が表された友禅染刺繍入りの袷である。上身は『源氏物語』の「花宴」、腰下は「賢木」の情景を意匠化している。
このように古典文学や謡曲に題を得た文様を御所解文といい、武家女性の衣服に典型的な意匠であった。袷は、4月1日から5月4日までと9月1日から8日までの着用と決まっていた。

紅葉賀図鎮扇（もみじのがずしずめおうぎ） 江戸時代　19世紀　縦32.3㎝

能の仕舞に用いる扇。また、一部のシテおよび囃子方、地謡、後見も用いる。全体が閉じて、扇の先を強く圧し鎮めているので「鎮扇」と呼んでいる。扇面の図柄は、宝生流の五雲に、舞楽に用いる鳥兜と紅葉が描かれている。『源氏物語』の「紅葉賀」の光源氏と頭中将が青海波を舞う情景を意匠化したのであろう。

展示室2

尾張徳川家の源氏物語

尾張徳川家伝来の源氏物語の名品としては、「国宝　源氏物語絵巻」「重要文化財　河内本源氏物語」がよく知られていますが、尾張徳川家の蔵書を受け継ぐ蓬左文庫には、このほかにも数多くの『源氏物語』や『源氏物語』に関する多くの写本が所蔵されています。

歴代藩主やその夫人たちの蔵書目録にも、源氏物語やその解説書の名前が頻繁に登場し、婚礼調度に『源氏物語』の写本が加えられた例も数多くあります。『源氏物語』が、時代を超えて読み継がれた古典であるとともに、支配階級にとっては、貴族文化の継承者としてのステイタスの象徴でもありました。

このたびは、徳川美術館における十年に一度の「国宝　源氏物語絵巻」の全巻公開（十一月十二日～十二月四日）にあわせ、「重要文化財　河内本源氏物語」をはじめとする尾張徳川家伝来の『源氏物語』やその注釈書の優品を御紹介します。

源氏物語（げんじものがたり）　三条西家本（さんじょうにしけぼん）
天文2年（1533）奥書　11.6×12.5㎝

源氏物語（げんじものがたり）　紹巴本（しょうはぼん）
天正8年（1588）奥書　24.1×17.1㎝

いずれも、尾張家三代綱誠（つななり）の側室で四代吉通の生母となった本寿院（1665～1739）の蔵書である。
「三条西家本」は、藤原定家が校訂した写本「青表紙本」系の『源氏物語』。巻末に三条西実隆の奥書があり、天文2年、孫の実枝が数人の手を借りて書写を終えたと記している。
「紹巴本」も『青表紙本』系の源氏物語。桐壺の巻の巻末に連歌師として知られる里村紹巴（1525～1602）の天正8年の奥書がある。他の巻は、紹巴一門による寄合書。

重要文化財　河内本源氏物語（かわちぼんげんじものがたり）（金沢文庫本）
正嘉2年（1258）北条実時奥書　32.0×25.5㎝

現存最古の河内本系源氏物語の写本（源親行等の校合による写本）であり源氏物語の完本としても最古のもの。
「夢の浮橋」の巻末に、正嘉2年（1258）5月6日、河内本の校訂者である源親行の所蔵本を写し終えたと記した北条実時（1234～76）の自筆の署名、花押入りの奥書がある。
北条氏の金沢文庫を出た本書は、足利氏、豊臣秀次、徳川家康と引き継がれ、家康の生前に尾張家初代義直に譲られた。
また、本書には、江戸時代初期製作で、漆工品としても注目される豪華な梨子地金蒔絵の書物箪笥が付属しており、尾張徳川家にふさわしい大名調度の一揃となっている。

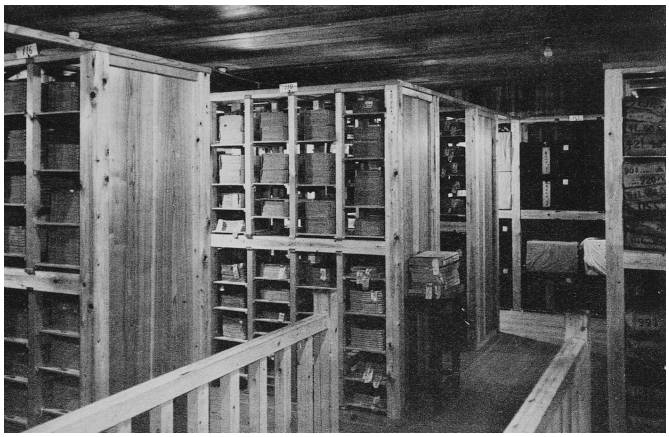
表紙:昭和10年(1935)開館当時の蓬左文庫の建物(現東京都豊島区目白)(昭和13年刊「蓬左文庫要覧」より)

表紙の写真は、開館当時の蓬左文庫の建物です。今年は、昭和十年(一九三五)、東京の目白で、蓬左文庫の公開が始まって七十周年に当たります。

同じ年、名古屋の大曽根では、徳川美術館が開館し、こちらも開館七十周年を迎えます。当時の蓬左文庫は、徳川美術館と同じ財団法人尾張徳川黎明会によって運営されていました。

昭和十三年からの文庫職員で、昭和二十五年、名古屋市移管に伴い蔵書とともに名古屋市蓬左文庫の職員となった故織茂三郎氏は、「蓬左文庫の建物は、地上二階、地下一階のレンガ造で、内に納めてある古書とは対照的に、とてもモダンな建物でした。外壁に蔦がまつわりついており、六月になると若葉が芽をふいてとても風情があり、また、周囲には 銀杏の木も植えられていました。」と語っています。

この建物は、現在一階と二階が徳川黎明会の本部、三階は黎明会時代の蓬左文庫附設の歴史研究室の後身にあたる徳川林政史研究所となっています。



当時の蓬左文庫書庫(昭和13年刊「蓬左文庫要覧」より)

昭和10年頃の徳川美術館とその周辺(写真提供　徳川美術館)

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL(052)935-2173　FAX(052)935-2174

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【市バス】名古屋駅バスターミナル(テルミナ2F)グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」停下車徒歩3分

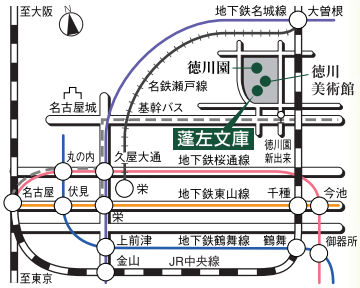
【名鉄バス】名鉄バスセンター(メルサ3F)4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」停下車徒歩3分

【JR】JR中央本線、「大曽根」駅下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」駅下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」駅下車2番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」停下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料　30分　120円)をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日のときは直後の平日)　12月中旬～1月3日　※催事により変更することがあります。

■展示室/有料　一般:1200円　高校生:700円　小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第68号　☆平成17年9月1日発行　☆編集・発行:名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷:菱源(株)
※この冊子は再生紙(古紙配合率100%、白色度80%)を使用しています。

N-expo city シンフォニー
愛・地球博 大地の塔 EARTH TOWER NAGOYA CITY 名古屋市パビリオン